

宮沢賢治「なめとこ山の熊」の深層構造

——〈読み〉の再創成の試み——

大谷 哲

〈語り〉の領域の対象化以前、「なめとこ山の熊」⁽¹⁾には未完性を指摘された経緯がある。草稿では〈熊の自死のシーン〉の後ろにあった〈荒物屋のシーン〉が前後を入れ替えられた創作過程に着眼した西田良子論が挙げられる。「テーマのズレは決定的」、「感動的なラストシーンと、冒頭の印象的な言葉が、少しも呼応しない」と否定的に断じた。語り手の自称「私」と「僕」の混在は製作者の推敲の不十分さの所以とする。また、その語り手の自称が「僕」となっている熊の解体場面について「作者はここで急に素顔を現わし」「なまの感情をぶつけている」という統橋達雄論⁽³⁾。熊の毛皮を買い叩かれる荒物屋の場面について「賢治の憤怒がこれほどあからさまにあらわれている文章」は他にないと捉えた中村稔論⁽⁴⁾。これらは総じて語り手のレベルと、作家のレベルの混同、無媒介な接続と整理できる。

一方〈語り〉の領域を視野に含めた天沢退二郎論では、「僕」を自称する語り手が介入の度合いを強める局面を「語り手が「僕」と名乗ってもどかしげに怒りにみちた私見を叩きつけたりする」場面だとして、次のように述べている。

この荒々しさはしかし、これまで論じられたように、単に主題に対する作者のプライヴェートな感情の露出にとどまるものではない。それは主人公の《豪気な小十郎》の性格と照応しながら、語り、の支配権を手中にして、詩人の成立を、さらにそのさきまでを見とけようとする詩人の、《書くこと》の激しい意志なのである。⁽⁵⁾

「語りを自らの支配に置こうとした語り手としての宮澤賢治」、その「想像力の映像」としての「淵沢小十郎」を「闘牛士」に、「熊」を「牛」に見立てたのが天沢の《読み》である。この天沢論を、「何かを犠牲にしてしか生きられないという生の根源的な困難性」、「そうした生を「小十郎」が生きること」「詩人の成立」を見出したものだ整理したのが須貝千里論である。実体的な作家論なのか、《語り》を扱う《作者》を論じるものなのかが判然としない天沢論だが、須貝は「《作家》《作者》の問題を直接的に持ち出すような、天沢以前の、そして天沢自身も断ち切ることができきっていない「なめとこ山の熊」の《読み》の「曖昧さと混同を克服していく」には「作品固有の《ことばの仕組み》の解明作業」を課題としなければならないと説いた。語り手の自称「私」と「僕」の混在は、その後二つの声に支配された、またはその相剋としての《語り》の問題として引き継がれていく。⁽⁶⁾

従来の問題構成を踏まえた本稿の目的は、(一)、語り手はいかなる文脈に拘束されているのか、(二)、表層のプロットを支える内的必然性(メタプロット)を捉える、(三)、作品の劈頭の一文「なめとこ山の熊のことならおもしろい」と物語内容の意味の整合性の吟味検討。《語り》の領域の問題化、《ことばの仕組み》の解明を前提に、《読み》の側からこの作品固有の構造論理を析出し、プロットの内的必然性に迫り《文脈》を掘り起こす。その際、語り、の主体性の吟味検討が鍵となる。先行言説については、文化論的アプローチの論考についても適宜参照し言及する。

I 伝聞と想像（再創造）に支えられた〈語り〉

(1) 語りの主体性から

「なめとこ山の熊」とは、「なめとこ山」や「名高い」はずの「熊の胆」さえ見たことがない「私」による先行する物語の語り直し（再創造）の物語である。この物語と語りの主体性（質）が、伝聞と想像（再創造）に支えられたものであることは、次の引用[A]に明らかである。

[A]中山街道はこのごろは誰も歩かないから露やいたどりがいっぱい生えたり牛が遁げて登らないやうに柵をみちにてたりしてゐるけれどもそこをがさがさ三里ばかり行くと向ふの方で風が山の頂を通つてゐるやうな音がする。気をつけてそっちを見ると何だかわけのわからない白い細長いものが山をうごいて落ちてけむりを立てゝゐるのがわかる。それがなめとこ山の大空滝だ。そして昔はそのへんには熊がごちゃごちゃ居たさうだ。ほんたうはなめとこ山も熊の胆も私は自分で見たのではない。人から聞いたり考へたりしたことばかりだ。間ちがつてゐるかも知れないけれども私はさう思ふのだ。とにかくなめとこ山の熊の胆は名高いものになつてゐる。／＼腹の痛いものにも利けば傷もなほる。鉛の湯の入口になめとこ山の熊の胆ありといふ昔からの看板もかかつてゐる。だからもう熊はなめとこ山で赤い舌をべろべろ吐いて谷をわたつたり熊の子供らがすまふをとつておしまひばかばか撲りあつたりしてゐることはたしかだ。熊捕りの名人の淵沢小十郎がそれを片っぱしから捕つたのだ。

（傍線・記号等引用者、以下同じ）

「このごろ」とは、その頃を想像し物語を語り起す主体性と、物語行為の現在時を逆照射する。語り手は「誰も」「中山街道」を歩かなくなった現在の時間性に拘束されている。誰も歩かなくなった道をさらに「三里ばかり」歩いたすえにある「大空滝」とは、かつて「熊がごちゃごちゃ居た」という場所である。ところが物語行為の現在においては「熊がご

「ちゃごちゃ」い、ない、不在ということまでを①は伝えている。〈熊がいない今〉からしてみれば、「熊がごちゃごちゃ居た」こと自体がにわかには信じ難い。何しろ②では語り手自らが、「間ちがってゐるかも知れない」と言うのだから。だがすぐさま「けれども」と継いだ語り手は、これから語られる「物語」が間ちがいてはいない、「たしか」なことを主張する。

このような〈不確かさ〉Ⅱ「間ちがっているかも知れない」と、〈確信〉Ⅱ「たしか」の間の振幅の中に立ち上る「物語」の真実（ほんとう）の主張、さらには「おもしろ」さ——劈頭の「なめとこ山の熊のことならおもしろい」——の生成は〈語り〉の構造論理に規定されている。したがって、敢えて〈間ちがってゐるかも知れないけれども〉とした上で主張される〈たしかさ〉とは、少なくとも事実／虚構といった二項対立的に弁別される類のそれではない。「人から聞いた」ことがどの部分で、「考へたりした」ことがどの部分であるかはよく分からないように語られているが、㊦での「間ちがってゐるかも知れないけれども私はさう思ふ」という声には既に「考へたりした」声が折り重なっていると判断すべきであろう。

(2) いる／いない、切断と交通

先の天沢論は、それ以前の論考に比べ作品の〈ことばの仕組み〉に遥かに届いた直観的言説だと言えるが、その画期性の反面、曖昧さ、不明瞭さも認められる。ここでは、引用㊦該当箇所而言及した天沢の別の言説を参照してみたい。

《そして昔はそのへんには熊がごちゃごちゃ居たさうだ》という箇所（これをAとしよう）と、その次のパラグラフの、《だからもう熊はなめとこ山で赤い舌をべろべろ吐いて谷をわたったり熊の子供らがすまふをとっておしまひばかばか撲りあったりしてゐることはたしかだ》という断言（これをBとしよう）の役割が明らかになる。／Aによれば、そのへんに昔は熊がたくさんいたとい、うのだから、いまはもういないのだと考えられる。しかしBは、いまでもいることを強く主張していて、それは想像上の真実として、物語内現実を導入していた。このところをいまひるが

えって考えるならば、Bは《熊たち》の、現在時の不在とは異なる次元における超時間性の主張であり、Aは逆に、その超時間性の一方での消失を告げている。そしてそれは、物語のラストに連動しているのである。／山の上の平らに小十郎の死骸を囲んで熊たちは《回々教徒の祈るとき》さながらにじっと動かなかった。殺すつもりでなかった小十郎という神を殺してしまうことによって、熊たちは自らの超時間性を終末へと導いてしまった——（後略）⁸。

天沢がAとした部分への見解に異論はない。問題は、熊について「Bは、いまでもいることを強く主張して」いるところだ。ここには物語の重要な仕掛けがあると考えられるだけに、深層構造についての分析と記述が要件となる。先走って言えば「熊」の存在について「Bは、いまでもいることを強く主張して」いるのなら、同時に「小十郎」もが「いまでもいることを強く主張して」いると言わねばならないはずだ。これは作品固有の〈ことばの仕組み〉に関わる深層構造から帰納すべき問題であり、本稿の〈読み〉として提示したい。おそらく天沢が「想像上の真実」「物語的現実を導入」として言わんとしたことを、本稿の立場から述べれば同時存在的な時空間の仕掛けということになる。冒頭には、〈いる／いない〉という逆を向いた二つの「たしか」さの重層性が仕掛けられており、語り運動はその振幅の中にある。熊が不在の現在時に、昔は「熊がごちゃごちゃ居た」話を聞いた語り手は、不在の時間性に拘束されながら、これを振り切る力を発動する。〈いる（ある）／いない（ない）〉の〈たしかさ〉の主張とは、不可知の世界があることへの〈確信〉（眼前には現れていない熊の存在の確かさ）と眼前に広がる世界の〈不確かさ〉の間の交通において実現されている。冒頭の景色は、語りの主体の認識と捉えられた対象がいったん切断され、交通がはかられた上でのヴィジョンとしてある。

加えて、民俗社会的な物語ならば「考へたり」する語りの主体性の表出は無用だ。むしろ言説主体の責任を回避しうる伝聞形式のみを採用する。「なめとこ山」も「熊の胆」も自分では見たことがないばかりか、「考へた」ものであることまで告げるとは、旧社会的共同体的価値観を共有する聞き手が想定された物語の自己同一性や、軌範との自覚的な切断の

表明でもあるといえよう。

II 物語の表層より

(1) 山の中の主・淵沢小十郎なる人物

淵沢小十郎とは、「[す]がめの楮黒いごりごりしたおやじで胴は小さな白ぐらゐ」、「掌は北島の毘沙門さんの病気をなほすための手形ぐらゐ大きく厚かった」。「生蕃の使ふやうな山刀とポルトガル伝来といふやうな大きな重い鉄砲をもって」
「縦横にあるいた」という。例えば、「生蕃」という語彙の發揮する〈まつろわざる者〉としての歴史的文化的なコノテーション。デフォルメされた異形の山男さながらの小十郎の相貌は、柳田國男が固執した〈聖なる野蛮人〉をも髣髴とさせよう。⁽⁹⁾ 山の中では主、里に出れば誰にも相手にされない——人間の世界(文明)／山の世界(未開)の二項対立の導入によりこの人物を境界性の徴を帯びた両義的存在と言うのは容易い。だが小十郎とは「熊がごちゃごちゃ居た」昔と、現在はいないことの〈たしかさ〉の担保として、この語り手が創造により丸ごと「考へた」(造形した)人物であることも否定できない。山中を「自分の座敷の中を歩いてゐるといふ風」に「ゆっくりのっしのっしと」歩き、熊がいなくなるまで「片っぱしから捕った」とは、いかにも「豪気な山の中の主」という絶対的存在にふさわしい表象ではあるだろう。

(2) 「因果」の物語

小十郎の相貌の語りに次いで、「あんまり一ぺんに云ってしまつて悪いけれども」と前置きし、語り手は自らの存在を顕在化させながら、「なめとこ山あたりの熊は小十郎をすきなのだ」と断言する。

ⓐそこであんまり一ぺんに云つてしまつて悪いけれどもなめとこ山あたりの熊は小十郎をすきなのだ。その証拠には熊どもは小十郎がぼちゃぼちゃ谷をこいだり谷の岸の細い平らないっぱいにあざみなどの生えてゐるところを通るとき

はだまって高いところから見送ってゐるのだ。木の上から両手で枝にとりついたり崖の上で膝をかゝへて座ったりしておもしろさうに小十郎を見送ってゐるのだ。(中略) けれどもいくら熊どもだつてすっかり小十郎とぶつかつて犬がまるで火のついたまりのやうになつて飛びつき小十郎が眼をまるで変に光らして鉄砲をこちへ構へることはあんまりすきではなかつた。そのときは大いの熊は迷惑さうに手をふつてそんなことをされるのを断はつた。けれども熊もいろいろだから気の烈いやつならごう咆えて立ちあがつて、犬などはまるで踏みつぶしさうにしながら小十郎の方へ両手を出してかかつて行く。小十郎はびったり落ちて着いて樹をたてにして立ちながら熊の月の輪をめがけてズドンとやるのだった。すると森までががあつと叫んで熊はどたつと倒れ赤黒い血をどくどく吐き鼻をくくんく鳴らして死んでしまふのだった。小十郎は鉄砲を木へたてかけて注意深くそばへ寄つて来て斯う云ふのだった。

④「熊。おれはてまへを憎くて殺したのでねえんだぞ。おれも商売ならてめへも射たなけあならねえ。ほかの罪のねえ仕事していんだが畑はなし木はお上のものにきまつたし里へ出ても誰も相手にしねえ。仕方なしに獵師なんぞしてるんだ。てめえも熊に生れたが因果ならおれもこんな商売が因果だ。やい。この次には熊なんぞに生れなよ。」^⑤／そのときは犬もすっかりしょげかへつて眼を細くして座つてゐた。／何せこの犬ばかりは小十郎が四十の夏うち中みんな赤痢にか(ゝ)つてたうたう小十郎の息子とその妻も死んだ中にびんびんして生きてゐたのだ。

はじめに自らの語りの性急さを批評するまなざしが示され、物語の行為性が前景化する局面だが、ここでの語りが小十郎に寄り添うものであることは、熊を撃つくだりに見やすい。「赤黒い血をどくどく吐き」、「死んでしまふ」かもしれぬ命のやりとりにおいて「あんまりすきではなかつた」とは、あまりに人間中心主義的な偏向である。「熊は迷惑さうに手をふつてそんなことをされるのを断はつた」というのも人間にはそう見えるにすぎない。これは小十郎に表れた現象、^⑩〈わたしのなかの他者〉の問題領域である。読者は小十郎にそのように表れた必然性までを捉えねばならない。

そもそも狩猟の対象の熊が「小十郎をすき」であると語られることに、読者がさほど違和感を持たないとすれば、それは④の小十郎の発話、彼の「因果」の物語によるところが大きい（後節に見る母子熊の会話のプロット、心優しい山男といったイメージ生成の協同にも由る）。熊を撃ち解体し、生活のためにその毛皮と胆を売る。④より窺えるのは、そんな自分の生業を罪ある仕事だと思っている人物の「内面」である。とはいえ、これだけではその「因果」の論理とて鉄砲という殺戮の道具を所有する人間中心に設えたものに過ぎない。罪障意識にふちどられた「因果」の物語を、殺生した熊に語りかけるこの人物が山男≡異人として人間界から迫害される役割を負わされていたとしても、生殺与奪の権利を握るのは人間の側、つまり小十郎であることに変りはない。この「因果」を、例えば小森陽一論のように「木はお上のものにきまつたし」といった地租改正以来の土地の私的所有の経緯、山への共同の入会権の抑圧、山林の国有化といった動きに連動した近代の歴史的産物と捉えることを全的には否定しないが、それだけでは物語の深層には届かない。⑤からは、「四十の夏」以後の小十郎がいかなる思いで自らの生を生きてきたかという直接的には語られていない領域もが視野に含まれてくるのである。

次に見るのは、従来は二人の語り手の問題として議論されてきたところである。傍線⑥は「僕」を自称する語り手の介入の局面である。熊の解体作業への嫌悪感を表明する語り手「僕」は、その光景を語ることをしない。

⑥それから小十郎はふところからとぎすまされた小刀を出して熊の「顎」のところに胸から腹へかけて皮をすうっと裂いて行くのだった。それからあとの景色は僕は大ききらいだ。けれどもとにかくおしまひ小十郎がまっ赤な熊の胆をせなかの木のひつに入れて血で毛がぼとぼと房になった毛皮を谷であらってくるくるまるめせなかにしよって自分もぐんなりした風で谷を下って行くことだけはたしかなのだ。

例えば仮説として、語り手が「人から聞いた」話では語られていたかもしれない。「名高い」「熊の胆」に関わる熊の解体

の光景を語る代わりに、その後の小十郎の姿を語っていたということも可能だ。「自分も、ぐんなりした風で」と語られる小十郎。「ぐんなり」とは脱力し、勢いの衰えたさまを表す形容だが、「自分も」とは何と等価的に属性を付与されてあるのか。血を洗い流し丸められ小十郎が背中に負う商品となった熊の毛皮、つまり死んだ熊と等価的にあることが「たしか」な人物として表象されている。むろん生物の命は、他の生命の犠牲の上に成立している。猟師という生業ならば尚のこと、自と他の命のやり取りに直接的に触れねばならない。彼は生活のため他の生物の生命を奪っているという生の営みの根本に日常的に触れざるを得ない人物である。「僕」によって、この生業を続ける小十郎の生には熊の死が織り込まれ——あたかも「死」が堆積していくのだと主張されていたようだ。このような人物が、世界を受け入れるための観念操作——自らの生を了解させるに不可欠なものとしての「物語」。死にゆく熊に向けた仕方と語る物語とは、小十郎が自らに向けた物語でもあった。小十郎とは、一見類型的、その豪気なイメージに反して、言葉の人であり、物語る人なのである。

いま重要なのは、熊の毛皮を川で洗い流した後の姿を「ぐんなりした風」と語られるまでに至ったこの人物には、家族が大勢死んだ四十の夏以後から「もう熊のことばだつてわかるやうな気が」するようになるまでの時間、が流がれていることだ。語り手が「一ぺんに云つてしまつて悪いけれども」と前置きをして「なめとこ山あたりの熊」が「小十郎をすきなことを語るときに、「一ぺんに」は語られないことがある。彼が物語りする人物となった内的必然性、現在の生の受け入れ難さまでを捉えねばならない。⁽¹²⁾前後するが、「熊ども」が小十郎を好きな「その証拠」として語られていたのが③の熊の姿だった。この命のやり取りの関係性では、猟師と熊が互いに見る・見られる関係であることを踏まえておきたい。小十郎に寄り添う語り手によって語られる熊のまなざしとは、容易に小十郎のまなざしに反転しえるのであるから。

III 物語の深層

(1) 母子熊の会話

「小十郎はもう熊のことばだってわかるやうな気がした」として語り出されるのが、次の母子熊の会話の場面である。

〔小十郎はまるでその二疋の熊のからだから後光が射すやうに思へてまるで釘付けになったやうに立ちどまってそっちを見つめてゐた。すると小熊が甘へるやうに云ったのだ。「どうしても雪だよ、おっかさん谷のこっち側だけ白くなつてゐるんだもの。どうしても雪だよ。おっかさん。」すると母親の熊はまだしげしげ見つけてゐたがやうと云った。「雪でないよ、あすこへだけ降る筈がないんだもの。」小熊はまた云った。「だから溶けないで残ったのでせう。」

「いゝえ、おっかさんはあざみの芽を見に昨日あすこを通つたばかりです。」小十郎もちっとそっちを見た。／＼(中略)

「雪でなければ霜だねえ。きつとさうだ。」ほんたうに今夜は霜が降るぞ、お月さまの近くで胃もあんなに青くふるえてゐるし第一お月さまのいろだつてまるで氷のやうだ。小十郎がひとりで思った。「おかあさまはわかつたよ、あれねえ、ひきざくらの花。」「なあんだ、ひきざくらの花だい。僕知ってるよ。」「いゝえ、お前まだ見たことありません。」

「知ってるよ、僕この前とつて来たもの。」「いゝえ、あれはひきざくらではありません、お前とつて来たのきさゝげの花でせう。」「さうだらうか。」(中略) 小十郎はなぜかもう胸がいっぱいになってもう一ぺん向ふの谷の白い雪のやうな花と余念なく月光をあびて立つてゐる母子の熊をちらつと見てそれから音をたてないやうにこっそりこっそり戻りはじめた。

この場面を「子どもの言語習得の場面の正確な再現」と捉えたのが千葉一幹論である。千葉は次のように述べている。この会話は、単に母子熊の心温まる対話を描いたのではない。ここは、子がどのようにして対象についての認識を

得るか、換言すれば、子はどのようにして言語を身につけていくかを描いているのだ。(中略) それは、子どもにとって最も情動的つながりの強い母との間でなされていたのだ。子熊が見せる白い部分への執着は、母熊との強固な情動的つながりを反映している。(中略) 子どもにとって、言語の習得とは、(中略) 具体的環境のもと、事物そして実際(13)に自分に言語の使用法を教える大人との(それは多くは母親だが)、強い情動的つながりの中でなされるものなのだ。論者も㊦が単に「心温まる対話を描いた」ものだとは思わないが、これが言語習得の場面を正確に捉えたものだとすれば肝腎なこととは何か。小十郎が物語りする人物であることは述べた。母子熊の会話の場面は、語り手の所有する言語観・世界観に強く関わりと解すべきだ。何らかの効果を想定し、プロットを配列編成するこの語り手が、いかなる言語観・世界観に拘束されていて、それが作中人物の小十郎にいかにかんているかということだ。だがその前に一方の人間の側である小十郎の母を含めたその家族構成を確認しておこう。小十郎が熊の毛皮を買い叩かれる荒物屋の場面より参照する。

㊦何せ小十郎のここでは(中略)米などは少しもできず味噌もなかったから九十になるとしよりと子供ばかりの七人(14)家内にもって行く米はごくわづかづゝでも要ったのだ。

九十になる母。子供とは小十郎の孫。この家族にはその子供の親、小十郎の子供の世代がない。前節の㊦⑤の「たうたう」には直接的言及のない他の係累の死も含意されているとも解せようが(小十郎の妻や父、兄弟姉妹とその子供等)、問題はそればかりではない。息子世代の欠落したこの家族は、小十郎の熊撃ちによって生活の糧を得ており、小十郎なくしてはその存続自体が困難なものだ。口早に言えば、母子熊の会話とは小十郎にとって表れた世界である。大人との強い情動的つながりの中の言語の習得、その反映として母子熊の場面があるのだとすれば尚のこと、そこには父母を亡くした孫、その親(息子夫婦)への小十郎の思いが重ね合わされてもいよう。それは「因果」の物語を死にゆく熊に向ける仕方(15)で己へと語らざるをえない小十郎の認識の現在と相関的にある。

(2) 生きてあること／死ぬこと

小十郎に聞こえてきた母子熊の会話とは、観念操作の所産、彼の「因果」の物語とも相関的にある。四十の夏、息子夫婦は死に自分は生き残った。生き残るに資する何かの必然が小十郎の内において生き残ったのではない。なぜ自分が死なず、息子夫婦たちが死んだのか。たまたま生き残ったに過ぎない自分という偶有性の問題（逆でもありえた⁽¹⁵⁾）。このことが四十の夏以降の小十郎の頭を占めなかったとは到底考えられない。いや占めなかった日はないはずだ。同様に獵師が、熊を撃つとき、他ならぬその熊でなければならぬ必然など何もない。小十郎の苛酷と同様の酷薄さを熊に対して行使するのが「大きな重い鉄砲」を持った「豪気な山の中の主」、小十郎自身にほかならない。そもそも「月の輪をめぐけてズドンとやる」小十郎の殺す熊は「気の烈しいやつ」に限ったわけではあるまい。そのような「生」をいかに自らに了解させるのかという難問。小十郎が、物語りする人物となった契機、内的必然性とはここにある。小十郎に織り込まれた偶有性の問題を看過し、「因果」の罪障意識を言えば物語の表層にとどまる。従来言われる〈弱肉強食の因果への悲しみ〉の如き主題系、現実世界を生きた〈聖人宮澤賢治像〉との無媒介な接続の傾きもこの出来事の意味の看過に起因する。生きてあることと死んでしまうことに何ら必然性があるのではない。この偶有性の問題をいかにして超えるか。この物語の深層（了解不能）を潜って、語り手は冒頭の「今」と「昔」の同時存在のヴィジョンを呼び込む語りを遂行していた。現在生きてあることの不確かさ、死んでいたかもしれない可能性の確かさ。母子熊の「からだだから後光が射すやうに思へ」、「なぜかもう胸がいっぱいになって」しまった小十郎。対象を捉えたとき、それは自己化された対象となる。語り手は「なぜか」を知っていないながら、その葛藤、出来事の意味を「一ぺん」には語らない。

(3) 貨幣と文字——エクリチュールを内包するもの——

引き続き、荒物屋の場面を見てみよう。従来、実体的な賢治像と語り手が無媒介に接続されてきた部分に立ち入る。

〔主人はだまってしばらくけむりを吐いてから顔の少（し）でにかにか笑ふのをそっとかくして云ったもんだ。／＼置いでお出れ。ぢゃ、平助、小十郎さんさ二円あげるぢゃ。〕店の平助が大きな銀貨を四枚小十郎の前へ座って出した。小十郎はそれを押しいたゞくやうにしておにかにかしながら受け取った。それから主人はこんどはだんだん機嫌がよくなる。（中略）小十郎はこのころはもううれしくてわくわくしてゐる。（中略）けれどもどうして小十郎はそんな町の荒物屋なんかへでなしにほかの人へどしどし売れないか。（中略）けれども日本では狐けんといふものもあって狐は獵師に負け、獵師は旦那に負けるときまってる。こゝでは熊は小十郎にやられ小十郎が旦那にやられる。旦那は町のみんなの中にあるからなかなか熊に食はれない。けれどもこんないやなづるいやつらは世界がだんだん進歩するとひとりで消えてなくなつて行く。僕はしばらくの間でもあんな立派な小十郎が二度とつらも見たくないやうないやなやつにうまくやられることを書いたのが実にしゃくにさわつてたまらない。

「いやなづるいやつら」は「ひとりで消えてなくなつて行く」という語り手の社会進化的未来観とともに、この語り手が伝聞と再創造の語りを書き記す（または書きつつ語る）ものであったことが明らかとなる。「あんな立派な小十郎が」「いやなやつにうまくやられることを書いたのが実にしゃくにさわつてたまらない」との憤りの内実とはいかなるものか。まず語り手「私」は「書くこと」（エクリチュール）の行為性にも拘束されており、書き手としての主体性が時折迫り出してくる際に「僕」を自称すると考えるべきだろう。さらにはこの物語が「書くこと」||文字によって仲立ちされていて、（純粹で透明な生きた発語行為||パロールに対して）不透明さが宿命づけられているという言語の問題系の射程を有し、いきおい語ることに書くこととの間に生じた差異をも喚起する。ポイントは「いやなやつにうまくやられることを書いた」ばかりか、「にかにか」している小十郎をも書いてしまったことが「しゃくにさわつてたまらない」「僕」の主体性の表出にある。

従来は、貨幣経済システム自体を悪と規定して、人間社会の矛盾の告発や是正を迫る主題を読む傾向、搾取する荒物屋

の主人を類型的な悪玉と捉え、そこに現実世界を生きた賢治の共産主義運動へのシンパシーや貨幣への嫌悪を重ねて読む発想、それから聖人宮澤賢治像との接続という思考パターンに陥るところである。熊との関係性において生殺与奪の権利（鉄砲という武器）を有する小十郎とは絶対的存在。肝腎なのは、その絶対者 \parallel 主である小十郎と荒物屋とを「にかにか」した笑みを浮かべていた点で、（弱みにつけ込まれ買い叩かれたにせよ）等価としてしまう「書くこと」の局面であることだ。両者を等価としてしまうものが何かと言え「荒物屋の主人」の狡猾さなどではなく、貨幣そのものであり、文字であることは踏まえておかねばならない。文字を言語世界における貨幣的存在だと言うのは今村仁司である。

文字と貨幣は、人間文化のなかで、類似した、いやむしろ構造的に同一の位置を占める。どちらも広義の「書くこと」（エクリチュール）を共通に内包している。文字は音声言語を記号化し、記号として書くように、貨幣は交換行為を記号化し、記号として書きとどめる。貨幣は、物と物との交換だけでなく、人と人との交通関係を記号化して表現する。貨幣は、人と物との両面で、関係の複雑さを凝縮し、圧縮し、縮減する。それは関係の文字化である。（中略）直接性と透明性への要求と願望は根深いが、そうした感情にもとづく語りは神話的になるほかはない。人間の現実は直接的でも透明でもないからである。複数の人間たちがともに生きることは、すでにそれ自体で直接性と透明性の喪失を意味している。（中略）人間関係はつねに、観念であれ物であれ、それらと交換するが、この交換は必ず媒介者なしにはすまない。人間関係が媒介的交換であるなら、人間の社会は最初から「不透明」であり、道徳的観点からいえば「不純」であり「汚れて」いるのである。それは人間が社会的に存在すること、複数の人間たちとともに生きることの本来的なあり方である。社会生活は不透明と不純であることを「運命づけられて」¹⁶ いるのである。

「どこかに透明で純粹な人間関係があり、それがいつのまにか不透明あるいは不純になるということではない。もともと複数の他者との共存とはそういうこと」なのだとすれば、小十郎が「立派な」ままであることを許さないものとは何か。

一つは「貨幣」。もう一つは、この物語が書かれたものであることを喚起する「僕」が「書いたのが実にしゃくにさわってたまらない」と述べた通り、「文字」、書くことに他ならない。「直接的でも透明でもない」「人間の現実」を生きざるを得ない人物として語られていた（書かれてしまっていた）のである。

また、人間の側が与えた狐の解釈という旧社会的な文化的軌範に基づくのが「狐けん」である。この三すくみの喩えの成立しない世界（近代システム）に「狐けん」を敢えて当て嵌めることで、いったんは「荒物屋の主人」を典型的な悪玉に設えようと試みた語り手だった。音声言語を記号化し、記号として書く文字と同様、「貨幣は交換行為を記号化し、記号として書きとどめる」もの。「貨幣」は「人と人との交通関係を記号化して表現する」。確かに「今、売らない限り、生活がなりたたず、小十郎には「売らない自由は与えられてい」ない。¹⁷⁾だからこそ熊の命を商品と化す市場原理のもとに「直接的でも透明でもない」「人間の現実」の表象として「荒物屋の主人」と「小十郎」は等価であった。偶有性の問題もが織り込まれた（立派な）小十郎であることを主張する語り手だが、迫り出してきた書き手主体のエクリチュールにより当初意図された語りとの間に差異（ズレ）が生じたことで、これを類型的な物語に設えることに失敗していた。この語り手にして書き手である主体性の表出から逆照射されるのは、この語りに潜められた言語の透明性と不透明性との拮抗であり、文字の書き手の希求する透明性（神話性）、透明性志向の力であったといえるだろう。

加えて小十郎の「因果」を一足飛びに「近代の人為そのものがつくり出した」歴史的産物としてしまえば、¹⁸⁾小十郎の個人的な経験の意味（四十の夏）の領域⇨偶有性の問題領域は捨象されてしまうだろう。小十郎が熊に向けて物語りする人物となった必然性、語られた「因果」の物語から参照される自らの「生」の受け入れ難さと、プロットの内的必然性までを見てきた。熊がいなくなるまで「片っぱしから捕った」「山の中の主」、淵沢小十郎という人物の内には偶有性の問題（他でもありえた・他なる可能性、逆にそうなるべくしてなった宿命としての表れ）が織り込まれていた。一家を支えるべき

息子夫婦の死が既に起こってしまったことである以上、それ以外にはありえなかった必然である。だが同時にそれは他（小十郎の死）でもありえたこと（息子夫婦の代わりに自らの死を差し出すことを願っただろう）として、偶有的なこととして表れてもいた。繰り返すが、小十郎にとつての苛酷と同様の酷薄さを、自らが熊に行使していることの矛盾を己にいかにか了解させるのか。小十郎が死んだ熊に語りかける「因果」の物語とは、彼のぎりぎりの「倫理」の現在でもあった。この人物の内には自分が生きてあることの不確かさと死んでいたかもしれない可能性の確かさ（今と昔の確かさ・不確かさ）とが表れていて、その振幅の内には認識する主体の位相を前提として物語を語り起す語り手にとっては、冒頭のへいる（ある）／いない（ない）の場の生成とは必然であった。

IV 熊との約束、母との対話

（一）「おかしなことが起こったのだ」——何が「おかしなこと」だったのか——

母子熊の会話とは小十郎に表れた現象、そこに響いていたのは小十郎の内なる声だった。前節㊦の小十郎の現在では「胸がいっぱい」になった理由は自覚していない。必然性と偶有性の表れを抱える人物が「熊のことばだってわかるやうな気」がするようになる事態とは、己の生を了解しえぬ「因果」の物語の失効と相関的にある。「物語」（観念操作）を超える言語を要請せざるえないところに小十郎の内的葛藤は及んでいる。次の㊧㊨での小十郎の認識・思考は、熊との関係性における「倫理」も含み込み、「宿命」を受け入れ、いかにその「外部」へ向かうかというベクトルにある。

㊧とところがある年の夏こんなやうなおかしなことが起こったのだ。／小十郎が谷をばちばち涉って一つの岩にのぼったらいきなりすぐ前の木に大きな熊が猫のやうにせなかを円くしてよち登ってゐるのを見た。小十郎はすぐ鉄砲をつきつけた。（中略）小十郎は油断なく銃を構へて打つばかりにして近寄って行ったら熊は両手をあげて叫んだ。

／＼おまへは何がほしくておれを殺すんだ。／＼あゝ、おれはお前の毛皮と、胆のほかにはなんにもいらぬ。それも町へ持って行ってひどく高く売れると云ふのではないしほんたうに気の毒だけれどもやっぱり仕方ない。けれどもお前に今ごろそんなことを云はれるともうおれなどは何か栗かしたのみでも食ってゐてそれで死ぬならおれも死んでもいゝやうな気がするよ。」^⑧「もう二年ばかり待って呉れ、□おれ「も」死ぬのはもうかまはないやうなものだけれども少し残した仕事もあるしたゞ二年だけ待ってくれ。二年目にはおれもおまへの家の前でちゃんと死んでゐるから。毛皮も胃袋もやってしまふから。」小十郎は変な気がしてちっと考へて立ってしまひました。熊はそのひまに足うらを全体地面につけてごくゆっくりと歩き出した。小十郎はやっぱりほんやり立ってゐた。(中略)それから丁度二年目だったががある朝小十郎が(中略)外へ出たら(中略)始終見たことのある赤黒いものが横になってゐるのでした。丁度二年目だし(中略)小十郎はどきどきとしてしまひました。そばに寄って見ましたらちゃんとおのこの前の熊が口からいっぱいに血を吐いて倒れてゐた。小十郎は思はず拜むやうにした。

因小十郎は朝うちを出るときいまままで云つたことのないことを云つた。「婆さま、おれも年老つたではな、今朝まづ生れで始めて水へ入るの嫌んたよな気がするぢゃ。」すると縁側の日なたで糸を紡いでゐた九十⑨になる小十郎の母はその見えないやうな眼をあげてちよつと小十郎を見て何か笑ふか泣くかするやうな顔つきをした。

熊から小十郎への直接的な問いかけとなつてゐる^⑥は、小十郎の〈罪ある仕事〉への自問である。^⑦は識闕に言語以前としてあつたらう答えである。「ぐんなりした風で谷を下つていくことだけはたしか」な人物の〈たしかさ〉——獵師をやめること、それが死を意味すること——が、ここに至つて言語化されることで小十郎にもたらされる認識。この語り手が、言語が現実に行先するという言語観・現実観に拘束された主体性を帯びてゐることは明白である。

いま問題は熊による^⑧⑧の発話部分である。この後「小十郎は変な気がしてちっと考へて立ってしま」つたのはなぜか。

これこそ小十郎に許容される認識の範囲外の声だった。「変な気がしてちっと考へて」、「ぼんやり立ってゐた」のもそのためである。「おかしなこと」とは、ここでは小十郎の思ひの投影として「熊のことばだつてわかるやうな氣」が、していたのではなかつたということだ。それから「丁度二年目」、自らの命を投げだした熊に小十郎が「思はず拜むやうにした」のは、あの声、が自己内対話でなかつたと、あの時に自らが不可知の領域にふれ得ていたと確信したからである。〈他ならぬあの熊〉と交わされた約束の時とは、小十郎にある選択を促す契機として外部が迫り出していた時なのである。

(2) 小十郎と母の対話

㉔の熊との会話は、物語の深層で小十郎と母との無言の対話圏に受け渡されている。㉔の「水へ入る」とは、山へ入り、猟を始める前のお清めの儀式かと思われる。いまは民俗的事項には深く立ち入らないが、この日小十郎がお清めをしなかつたとすれば、既に猟師としての生を終える覚悟があつたということだ。また㉔の「小十郎を見て何か笑ふか泣くかするやうな顔つきをした」母とは、この沈黙の内に息子の言葉の全てを理解しただろう。猟師としての死は、小十郎の生の終わり。そして家族の死。〈他ならぬその熊〉であるべき理由もなく繰り返した熊捕り。商品として売れなければ何の意味もない熊の死。最周縁まで覆いつつある近代のシステムからの解放まで……。だが、約束を果たしたあの熊との会話の中で己の言葉、「おれも死んでもいゝやうな氣がするよ」が嘘ではないことを〈他ならぬあの熊〉に未だ伝えられてはいない。熊からの問い(㉔)に対する小十郎の答え(㉔)とは、貨幣の介在するシステムからの撤退にして、自らが「不透明と不純であること」の拒否の表明であつた。さらには、もし複数の人間が共存する状態が「媒介的交換をしながら生きること」であるならば、これは「社会的に存在すること」、つまり「人間の現実」からの撤退の宣言でもあつた。

(3) ストーリーの結末、物語の始まり

小十郎が選択したのは「直接性と透明性への要求」、熊の約束に対して自らの死を差し出すことであつた。それは息子

たちの代わりに捧げることを願ひ続けた自らの命でもある。小十郎に寄り添ひ続けた語り手は、ついに次の□⑩で彼の「心持」を語ることを断念し、「それからあと」の死そのものが語り手にとつても語りえない外部であることを表明する。

□それから遠くで斯う云ふことばを聞いた。「おゝ小十郎おまへを殺すつもりはなかった。」もうおれは死んだと小十郎は思った。そしてちらちら青い星のやうな光がそこらいちめんに見えた。／＼「これが死んだしるしだ。死ぬるとき見る火だ。熊ども、ゆるせよ。」と小十郎は思った。それからあとの小十郎の心持はもう私にはわからない。

死にゆく小十郎の耳には、「おゝ小十郎おまへを殺すつもりはなかった」との熊の声。この時小十郎は了解しただろう。熊に向ける仕方ですつた「因果」の物語は、死んでいった熊たちの耳に届いていたのだと。小十郎という表象に必然性と偶有性と外部の問題が織り込まれていた点に立ち返れば、「人間の現実」からの撤退とは他でもありえた可能性への命がけの跳躍でもあったと言える。今村仁司は、「直接性と透明性への要求と願望は根深いが、そうした感情にもとづく語りは神話的になるほかはない」と述べていた。⁽²⁰⁾以上は、貨幣∥媒介項抜き命のやり取りと、書き手「僕」の希求する透明性志向との相即性という文脈において理解されるべきである。

この〈語り〉には依然として書き手「僕」の声が潜伏していることも忘れてはならない。おそらく「僕」はここまで書いて満足であろう。言語なくして認識・思考はありえず、現実言語が先行するという言語観認識に拘束されたこの語り手は、エクリチュールに宿命づけられた不透明性を振り切りながら、ついに神話的な〈語り〉を獲得したのではないか。

「なめとこ山の熊」は、物語内容においても物語行為においても外部の領域を喚起することに自覚的なものであった。従来「宗教的礼拝」や「大きな愛に化石する」「修羅の世界からの解放」などを言われる結末、小十郎の死後「三日目の晩」のヴィジョン。ここから冒頭へと折り返せばどうか。すると眼前に広がる〈昼〉の風景。そこには「熊捕りの名人」

小十郎も「ごちゃごちゃ居た」熊もいない。〈夜〉と〈昼〉の二重写し、同時存在の世界があらためて立ち上がってくる。熊が「ごちゃごちゃ居」る世界ならば、その熊を捕る名人小十郎もいる。熊がない世界ならば小十郎もいない。つまり、熊も小十郎も単独では意味をなさない。そのようなありようが「おもしろい」のだと言うことも可能だ。このありようを前提にすれば、「なめとこ山の熊のことなら」「考へたり」しただけでも「おもしろい」とも解することができる。

天沢が楽々と述べたところを辿々しくも具に見ていかねばならない。いま次のような仮説は可能だ。(i) 語り手「私」は「物語」の「たしか」さの担保として、想像によって「熊捕りの名人」淵沢小十郎なる人物を造形することで、その人物に物語の「おもしろさ」を担わせようとしている。(ii) 「名高いもの」になっている「なめとこ山の熊の胆」までを摘出する熊捕りの名人の伝承を聞いた語り手「私」が、その名人が相手取っただろ熊について、「考へたり」(想像・再創造)した物語が「なめとこ山の熊」である。(i)か(ii)かの確定はできないがどちらも否定できない。これは「なめとこ山の熊のことなら」〈なせ〉「おもしろい」のか、についての考察とも対応・交差するはずである。

小十郎の内に織り込まれた偶有性と外部の問題領域は、プロットをプロットたらしめる内的必然性としてある。冒頭の同時存在を引き出す力。物語はこの人物の内に現象する確かさと不確かさの振幅を潜って語り起こされていた。

では「なめとこ山」も「熊の胆」も「自分で見た」ことがない語り手にして書き手主体の声と文字の葛藤、透明性への志向において実現されていたものとは何か。リアリズムの価値体系の観点から冒頭の同時存在の仕掛けを考慮すれば、これは「真理を保証する「現実なるもの」が消滅してしまった」ポストモダンの世界観認識の位相を潜って、なお希求する〈たしかさ〉と「倫理」をめぐる神話的な物語であった——という、そのことまでが伝わるように全てが語られていたと了解しえるのである。

- 〔註〕
- (1) 続橋達雄によれば、賢治が歿した翌年の一九三四（昭和九）年七月、耕進社刊行『現代童話集』（児童文学研究会編纂）への所収を初出するとされている。『宮沢賢治大辞典』渡部芳紀編（勉誠出版 二〇〇七・七）参照。
- (2) 西田良子「なめとこ山の熊」論——宮沢賢治の視点——（『日本児童文学』別冊『宮沢賢治童話の世界』すばる書房 一九七六年二月号臨時時）↓『宮沢賢治論』（桜楓社 一九八一・四）。西田論の根底にあるのは、熊が自死の約束を果たさず場面では常体に敬体が混入する点や、語り手の「私」と「僕」の混在を製作者の推敲の不十分さと見なす解釈（枠組）である。
- (3) 続橋達雄『宮沢賢治・童話の世界』（桜楓社 一九七五・一〇）。傍点は原文ママ。
- (4) 中村稔『定本 宮沢賢治』（七曜社 一九六三・一一）。
- (5) 天沢退二郎「詩人『宮沢賢治』の成立」——「鹿踊りのはじまり」から「なめとこ山の熊」へ——（『展望』一九六八年一月号）↓『宮沢賢治』論（筑摩書房 一九七六・一一）。傍点は原文ママ。
- (6) 須貝千里「……けれども私はさう思ふのだ」「なめとこ山の熊」で何が起っているのか（『新しい作品論』へ、〈新しい教材論〉へ3）（石文書院 一九九九・六）。例えば、田近洵「『宮沢賢治』「なめとこ山の熊」研究」（『国文学 解釈と鑑賞』至文堂 一九七九年八月号）、松本議生「『なめとこ山の熊』——その〈対話〉と〈語り〉の世界——」（『日本文学』一九八九年七月号）。
- (7) メタプロットとは、プロットを支える内的必然性。これは田中実の用語であるが、田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 理論編』（教育出版 二〇〇一・六）の「キーワードのための試み」には、「〈ことばの仕組み〉は読み手に現象した〈本文〉の仕組み、そのメカニズム全体を指しているが、〈メタプロット〉はその中の重要な働きの一つ。ちなみにプロットはもともとあるストーリーを因果関係によって構成したものであるが、〈メタプロット〉はその因果関係のさらに根源的なものに目を向けている」とある。
- (8) 天沢退二郎「なめとこ山の熊」と「オツベルと象」（『月刊国語教育』一九八六年四月号・五月号）↓『宮沢賢治』注（筑摩書房 一九九七・七）。傍点は原文ママ。
- (9) 柳田國男「山人考」（大正六年日本歴史地理学会大会講演手稿）、「山人外傳資料」（大正二年三、四、八、九月、大正六年二月「郷土研究」一卷一、二、六、七号、四卷十一号）。
- (10) 註7前掲書。「通常、我々が他者と呼んでいる対象は、〈わたし〉が捉え、理解した他者のことである。理解するということは、

とりもなおさず対象（他人・外界）を自分の方まで引き寄せ、自分のなかで造り変える（自己化する）ことであり、主体が理解した、認識したと思ったとたんに対象は主体の側に組み込まれてしまう。この自己化された他者を（わたしのなかの他者）と名付けた。

(11) 小森陽一『最新宮沢賢治講義』（朝日新聞社 一九九六・一二）。

(12) 註7に同じ。

(13) 千葉一幹『賢治を探せ』（講談社 二〇〇三・九）。言葉が「本来強い情動性を伴って習得され、また使用されるもの」である点を母子熊の場面に見出す。「賢治の思い描いた「まことのことば」も同様、「それが使われる具体的環境と強い情動的つながりを有した有縁的なものとして発せられるもの」と説き、本作と賢治の「まことのことば」についての接続をはかる。

(14) 大森莊蔵「真実の百面相」『流れとよどみ―哲学断章―』（産業図書 一九八一・五）。

(15) 大澤真幸「補章 倫理の偶有的な基礎―9・11と3・11の教訓」『文明の内なる衝突 9・11、そして3・11へ』（河出書房新社 二〇一一・八）、『夢よりも深い覚醒へ 3・11後の哲学』（岩波書店 二〇一二・三）参照。

(16) 今村仁司『貨幣とは何だろうか』（筑摩書房 一九九四・九）。榜点は原文ママ。

(17) 小森 註11前掲書。

(18) 小森 註11前掲書。

(19) 今村 註16前掲書。

(20) 今村 註16前掲書。

※作品の引用は【新】校本宮澤賢治全集』第十卷 童話Ⅲ 本文篇（筑摩書房 一九九五年九月二五日）に拠った。